

唐沢は、高山建設の香川宛にメールを送信すると、その後、徳島設備の岸田に電話を入れた。

「はい、徳島設備でございます」

「小池工業の唐沢と申しますが、企画部の岸田さんをお願いします」

「少々お待ち下さい」

「はい、企画部です」

「小池工業の唐沢と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、岸田さんをお願いします」

「申し訳ありません。岸田はただ今席をはずしておりますが」

「何時頃お戻りになりますか？」

「今日は一日、東京の本社へ行っておりますので、恐らくこちらへは戻ってこないと思います」

「そうですか。明日の予定はいかがでしょう？」

「明日は九時にはこちらへ出社する予定です」

「では、明日の朝でも構いませんので、川崎支店の方にお電話いただきたいとお伝え願えますか？ 一応電話番号を申し上げます。〇四四―九五―一五―一五―一です」

「〇四四―九五―一五―一五―一ですね。失礼ですが、お名前をもう一度お願いします」

「小池工業の唐沢です」

「小池工業の唐沢様ですね。明日の朝、岸田に申し伝えます」

「よろしく願います」

「失礼します」

受話器を置くとすぐに唐沢の電話が鳴った。

「はい、唐沢です」

「高山建設の香川です。お世話になっております。先程送っていただいたメールの件でお話したいことがあるのですが、今お時間は大丈夫でしょうか？」

「すみません。この後ちよつと打合せが入っているんですよ。先程のメールですが、一応大まかな部分についてだけ先に目を通していただこうと思って送らせていただいたのですが、詳しい内容については一度お会いしたうえで、と考えております。いかがでしょうか？」

「はい、構いません。金曜日以外でしたら私はいつでも結構ですので、唐沢さんのご都合のいい日に合わせます」

「それでは、来週の火曜日はいかがでしょう？ 五月九日ですが」

「はい、大丈夫です」

「では大変申し訳ありませんが、時間と場所については近いうちに追ってこちらからご連絡するということですのでよろしいでしょうか？ 勝手言っすみません」

「とんでもないです。携帯のほうにかけてもらえれば、いつでもつながりますので」

「わかりました。では失礼します」

唐沢は電話を切ると、慌てて応接室へ向かった。